

いなほ

第 87 号

2019 年 4 月 20 日

NPO 法人 萌

代表 波多江 伯夫

横浜市戸塚区深谷町 893-2

B 型事業所 工房いなほ

相談支援事業所 ふかや

自立生活援助事業所 ほなみ

グループホーム 独歩

TEL 045-443-7416

URL <http://www.mo-e.jp>

新年度に向かって

僕たちの事業は大きく分けて 2 つに分類される。ひとつは収益事業ともうひとつが福祉事業である。共通点としては障害者の自立生活支援である。

NPO 法人 萌の構想として、就労支援 B 型工房いなほを中心に、地域生活を支援する相談支援事業所ふかや、ひとり暮らしを支援する自立生活援助ほなみがある。ひとり暮らしは困難であるけれど地域生活を支援するグループホーム独歩がある。支援の在り方として訪問支援(アウトリーチ)を重視した自立生活支援を考えている。

年をとっていくとさまざまな問題が生じてくる。糖尿病、高血圧、高脂血症などの生活習慣病、精神疾患、慢性的な身体疾患などがある。そのために医療との連携が必要となる。医療機関との関係はもちろんだが、在宅医療や訪問看護との連携を強めている。自宅に訪問して医療を受けることは生活支援となるので心強い。

工房いなほの就労支援がメインである。就労支援の中心は工賃アップと企業への職場定着支援である。工房いなほの職種はパレット製造、非鉄金属リサイクル、メール便、農業、市の委託事業であるが、中核はパレット製造業である。今年度の平均工賃目標は 3 万円であるが、パレット班は 6.7 万円である。

パレットは発注会社から依頼があり、見積して発注となる。材料提供と材料仕入の 2 通りがある。仕入れの場合は木材会社に依頼することになる。納期に間に合うように製造する。1 日生産目標は納期日から逆算しておのずと決まる。パレット製造は 2 人一組が基本である。製造工程は作業の動きの工程となってムダの無い効率的な作業が要求される。生産能力は 1 時間当たりの生産数によって認識される。製造ははじめとおわりの工程の流れで分かりやすい。非鉄金属リサイクルも分解工程があり、作業としてはライン型もあるが多能工型もある。

企業への就職を希望する利用者もいる。製造業は人材不足しているので、雇用には有利である。去年は 2 名が就職した。ジョブコーチが職場定着支援をしている。

就労支援事業所は障害者たちの働く場であるが、終着点ではない。工房いなほを川上として企業の就職を川下とすれば川は淀みなく流れていかななくてはならない。社会との循環をつねに生み出していくことが、地域で暮らす原動力となる。

追悼 E/Z 一さん

工場の入り口に、ジャージ姿のおじさんがこちらをうかがっていた。近所の方かなと思って挨拶した。運転手の募集があったので伺ったということだった。気さくな方で、初対面でも臆することなく、はっきりとものをいう人だった。あれから5年がたった。

製品を相手に届けるために、時間を厳守する、荷崩れはしないこと、積載オーバーはしないなど当たり前のようだが日々の仕事の中で守ることはかなりの意識がないとできない。運転手としてプロ意識が高かった。

5年前は、2t車で雨が降ると1時間もかけてパレットにシートをかぶせていた。それでも製品は濡れて納品先から苦情を言われたことがあった。パレットを運ぶには2t車では効率が悪く、雨防止のためにはウイング車が必要だと提案されて、4Tウイング車を購入することにした。いまは2台稼働している。

個性的な人であったが利用者にも理解があった。電車通勤が困難になった利用者の送迎をしてくれていた。また利用者の引っ越しも嫌な顔もせず手伝ってくれた。

なによりも僕たちの福祉に対する共感を持ってくれていた。金儲けが下手で採算の取れない仕事ばかりして、夜遅くまで働いてばかりいると呆れていたが、見捨てることもなく最後まで付き合い続けてくれた。

前日まで元気だったのに、突然自宅で亡くなられた。具合が悪かったのかもしれない。もともと体の不調をいう人ではなかった。今日もいつものようにトラックに乗ってパレットを運びお昼前に帰ってくる。いつものように立ち話をして午後便に出ていく。そんな光景が突然絶たれた。心の中に穴が開いて、何が起こったのか、時間が止まり、戸惑う自分がある。5年という歳月を思い出しているうちに、取り留めのない出来事がかけがえのない時間としてよみがえり心の中の空虚を埋めていく。もう話すこともなく遺影の中でしか会えない。それでも個性的に生きてきたE/Zさんに出会えてよかった。Eさんありがとう。感謝。

2019年4月28日

波多江伯夫



懐かしい2トン車時代 / ウイングの4トンが良いと言われリースを開始

利用者から亡くなったEさんへ贈る言葉

パレット班・非鉄班より

*びっくりしました。一緒に仕事していたから。長い間ごろうさまでした。ゆっくり休んでください。

*フォークやってもらった。寂しいです。

*お世話になりました。悩んでいたときに、パレット続けられるよね、お姉ちゃんならと言われた。感謝しています。立派なパレットうちになります。感謝。

*長い間、パレットを運んでくれてありがとう。

*1年でしたが、失敗したパレットと一緒に直しに行ったこと。ご飯をおごってくれた。

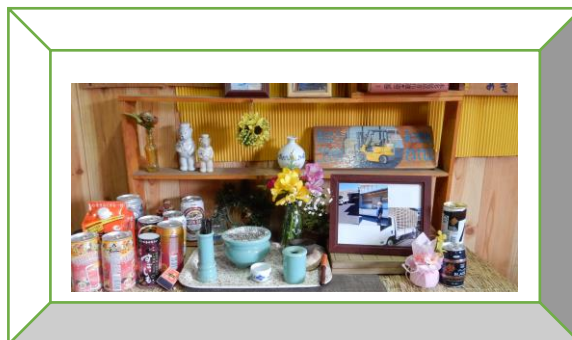
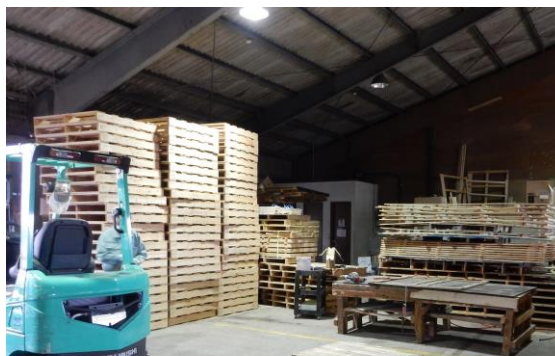
*信じられなかった。引っ越しでお世話になった。葬儀に出たいが出られない。服がないから。

*施設外就労に行くとき、車を運転してくれた。

*車で週3回送迎してくれた。



工場のレイアウト変えました



追悼

事例検討3 **35年前の(知的障害者を取り巻く環境は)**:

私がいわゆる福祉の道に入ったのは、大学を卒業して川崎市のアパートでいわゆるフリーターをしていた頃(当時はその言葉もなかったが)。工場でのアルバイトをして暮らしていた私を見るに見かねた母親が、「何の職業なら働いてよいのか?」と聞いてきた。私は何故か、「養護施設の寮母みたいな仕事」と答えた。(つまり、なにかやるなら寝食を共にしたい)という意味だったように思う。数日たち、母親が持ってきた仕事は、知的障害児の施設の職員だった。偶然にも面接に受かりそこの見習い職員になった。当時は部屋を移動することに、カギをたくさん持ち歩き、カギを開けては、閉めることが義務付けられていた。

食事は黙って正座して食べていた。食事は和気あいあいとおしゃべりしながら食べることが普通だし、脚は崩して食べても、どうという事はないと思っていたので、私はそうしていた。ある日の昼休み、庭のベンチに横になり、休憩していた。職員がやってきて、「あなたみたいな人が来てから、子供たちのお行儀が悪くなった」と言われた。私は自分の考えを述べたら、その人は怒って帰った。

その次に怒られたのは・・・宿直の時、徘徊する子供がいたのだが、私は添い寝していた、そうすると、すぐに寝てくれたからだ。他の職員は、ベットのその子を縛り付けていた。そんなことは、いけないことだと私は思っていたから・・・「あなたが、添い寝すると癖になるから辞めてほしい」と怒られた。

私には所謂、障害について全く知識がなかった。自分が正しいのか、間違っているのか、自信がなかった。

結局そこを辞めて、1年間、特殊教育を学ぶ学校に入り直した。あの頃の、障害者を取り巻く環境は、今日では考えられないものであった。福祉は知識が必要である。絶え間ない学習が必要であると思う。学ぶ姿勢抜きに、福祉は語れない。



日本ミツバチの分蜂

編集後記

また1人、萌の歴史を知っている配送担当の職員が亡くなった。私が最後の言葉を聞いた存在になってしまった。寂しいことである。いつだって亡くなった人は心の中でよみがえるのだと思う(所長)